

# 南青協便り 第235号



南米産業開発青年隊協会会報

2025年10月15日発行

Boletim n.235 Seinentai do Brasil : Edição 15 de Out. de 2025



8月24日、慰霊祭で焼香する参列者と和尚さん



慰霊碑前での記念撮影

## 目次 (第 235 号) ÍNDICE (n. 235)

一、表紙：上、8月24日、慰霊祭で焼香する参列者と和尚さん 下、慰霊碑前での記念	..... 1
一、Índice 目次	..... 2
一、慰霊碑と添えられた隊長の写真・花・線香、慰霊祭参列者と円光寺、 寺と桜、楽しく談笑し、美味しい料理をいただきました	..... 3~5
一、慰霊祭挨拶 会長 渡辺進	... 6
一、Saudação da Cerimônia Memorial Presidente S.Watanabe	... 7
一、青年隊が慰霊法要 ブラジル日報 2025年9月17日	... 8~9
一、月例会報告(8月、9月、10月) 会長 渡辺進	... 10~12
一、戦争のこと ポルトガル 10期 岡井よししげ	... 13~16
一、Referente as Gerras Portugal 10ª Turma Y Okai	... 17~21
一、広島平和記念式典と参列された盆子原国彦さん(6期)	... 22
一、1945年の広島と長崎への原爆投下関連の写真です 上、広島と長崎に投下された原子爆弾の噴煙 下、広島原爆ドームと長崎平和祈念像	... 23
一、広島市原爆死没者慰霊式 サンパウロ 6期 盆子原国彦	... 24~29
一、大久保俊輝先輩の講話を聴いて 富士宮市 産業開発青年隊同窓会長 鈴木浩明	... 30~33
一、会計報告 7、8、9月分 サンパウロ 8期 長田譽歳	... 34~36
一、8月の憂鬱 イグアスー 10期 齋藤信夫	... 37~39
一、トランプがルーラに鉄槌 サンパウロ 9期 貝田定夫	... 40~42
一、ブラジル日報、印刷版の発行日数を減らす決断 新聞	... 43~46
一、85歳の人生。妻の誕生日の写真 8期 長田譽歳	... 47~49
一、長田譽歳さんの奥様ルイザさん ソロカーバ 8期 早川量通	... 50~51
一、もう一度、古代エジプト特別展を観ました(2) 美術館に隣接したロダン館にある彫刻です(2) 静岡県富士宮 8期 志方進	... 52~59 ... 60~65
一、【編集委員】【次号予定、お願い】【編集後記】	... 66

### 【備考】

慰霊祭の写真は曾我義成さん(4期)と早川量道さん(8期)の提供です。  
曾我さん提供写真は息子さんの Marcelo Shigueo Soga さんの撮影です。

【訃報】佐野孝雄氏(2期47番)8月28日に逝去されました。

ご冥福をお祈り申し上げます。

慰霊碑と添えられた長澤亮太隊長の写真・花・線香



# 円光寺前での慰霊祭参列者 合計42人でした

この写真の撮影者はマルセーロ曾我シゲオさんです



楽しく談笑し、美味しい料理をいただきました



円光寺と桜の花



談笑中の仲間



ご馳走の取り分け



去る8月24日、今年の慰霊祭が円光寺で開催されました。昨年同様たくさんの皆さんに参列していただきました。

和尚さんには心のこもったお経をあげていただきました。今年も昨年同様、和尚さんに無くなった先輩方の名前を1人1人読み上げていただき供養していただきました。大変ありがとうございました。

南米産業開発青年隊は来年で70周年を迎えます。326人の仲間が移住してきました。そしてこの8月1日現在で149名の後輩、同級生、先輩がお亡くなりになりました。

当然のことですが、年々亡くなる方は増えていきます。悲しいことではありますが、残ったものは元気に明るく、楽しく毎日を送るよう心掛けたいものです。

昼食会では奥様方がたくさん作ってくださった美味しい料理をいただきました。前日は小春日和の大変良い天気でしたが、当日は一転して、雨までは降りませんでした。年寄りにはちょっと堪える空模様でした。半袖の先輩もおられました。尊敬です。

昨年同様総勢40名は超えていたと思います。お孫さんはもちろんひ孫と思われるかわいいお子さんもおられました。

そして全員で慰霊碑のまえで写真を撮り、無事終了しました。

食べきれず残った料理はお弁当にして皆さんにお持ち帰りしていただきました。奥様方の配慮には感服です。

食べて、飲んで、語って、本当に楽しい慰霊祭でした。亡くなった先輩がたも腹一杯になって草葉の陰で満足してくれていることと思います。

次ページからに4期曾我義成さんが手配してくださったので、8期吉田欣司氏の娘さんの吉田司(つかさ)さんの翻訳による本稿のポ語訳を掲載します。◆

## **Saudação da Cerimônia Memorial – 24 de agosto de 2025**

**Presidente Susumu Watanabe**

**Realizamos a cerimônia memorial de 2025 no Templo Enkoji. Assim como no ano passado, tivemos bastante gente presente.**

**Muito obrigado a todos que participaram da cerimônia memorial de 2025.**

**Agradecemos de coração ao monge pelos sutras recitados.**

**O monge, como sempre, leu um por um os nomes dos veteranos falecidos e fez a homenagem a todos.**

**No próximo ano, o Seinentai (Grupo de Jovens para o Desenvolvimento da América do Sul) completará 70 anos. Ao todo, 326 companheiros imigraram.**

**Até o dia 01 de agosto deste ano, 149 colegas já faleceram.**

**É natural que, com o passar dos anos, mais pessoas nos deixem. Isso é triste, mas nós que continuamos aqui devemos procurar viver bem, com saúde, alegria e disposição.**

**Depois da cerimônia, no almoço, vamos aproveitar as comidas preparadas com carinho pelas esposas e, em um clima alegre, recordar aqueles que se foram.**

**Alguns veteranos até estavam de mangas curtas – que coragem!**

**Acredito que tivemos mais de 40 pessoas, como no ano passado. Havia netos e até crianças que pareciam ser bisnetos.**

**Depois tiramos a foto em frente ao monumento e a cerimônia terminou tranquilamente.**

**O que sobrou foi colocado em marmitas para todos levarem para casa – um cuidado que merece reconhecimento.**

**Comemos, bebemos e conversamos bastante. Foi uma cerimônia alegre, e tenho certeza de que os veteranos que já partiram também ficaram contentes lá de onde estão.**



# 南米産業開発青年隊が慰霊法要＝家族ら 42 人が先亡者 冥福祈る

ブラジル日報 2025 年 9 月 17 日



南米産業開発青年隊協会（渡邊進会長）は 8 月 24 日（日）、サンパウロ州イタペセリカ・ダ・セーラ市の円光寺で 15 回目の同隊員慰霊法要を行った。同寺にある同協会員先亡者慰霊碑の前で、会員とその家族ら約 42 人は先亡隊員の冥福を静かに祈った。

この慰霊碑は 2011 年に建立されたもの。法要では、円光寺住職マスコス・ロペス・リマ導師が先亡者の名を一人一人読み上げて読経をした後、参加者らが焼香して供養した。

挨拶に立った渡邊会長（75 歳、静岡県）は、「8 月 1 日現在で 149 名の先輩、同期生、後輩がお亡くなりになりました。年々亡くなる方は増えていきます。悲しいことですが、残ったものは元気に明るく、楽しく毎日を送るように心がけたいもの。今日は奥様方が作ってくれたご馳走を食べて、飲んで、語って、本当に楽しい慰霊祭でした。亡くなった先輩方も腹

一杯になって草葉の陰で満足してくれていることと思います」と笑顔で述べた。

5期の菊地義治さん（85歳、岩手県）は「2世、3世の皆さんが多く参加してくれたことは、仏様の功德というか因果応報。先人に対して感謝の気持ちを忘れずに、これからも頑張りましょ」と語りかけた。

4期の曾我義成さん（88歳）は「来年も多くの人が集まって、和やかに家族揃って歓談しましょう。継続が大事です」と述べた。

フォス・ド・イグアスーから飛行機で駆けつけた斉藤信夫さん（82歳、10期）は「2世、3世がこんなに来てくれ、私たちの先輩や仲間のことを思ってくれているのを実感し、涙が出るほど嬉しい。もっと近ければ頻繁に来たいです」と残念そうに語った。

早川量道さん（82歳、8期）は「普段は裏方をしてくれる長田譽歳（おさだ・たかとし）さんが目の手術の参加できなかったのが残念ですが、遠くフォスから斉藤さんが来てくれ、ジュンジャイ市から荒木荒二郎夫婦と子供、そして神代の青年隊番号1の故磯中雄二先輩の奥様と息子さん娘さん夫婦がいつも参加されるのが嬉しい」と述べた。

親睦会は別室サロンで持ち寄りの料理が振る舞われ、参加者らは親交を深めた。寿司、おにぎり、焼き鳥、焼き魚など自慢の手料理をお腹一杯食べた。会員家族の2、3世同士も仲良く時間が経つのを忘れて楽しく語り合い、最後に別れを惜しんでいた。

建設省が主導した「産業開発青年隊」事業は終戦直後、農家の二、三男を技術者に育成して国の復興に役立てる運動として広がった。主に国内の農業や建設など様々な分野で活躍し、ブラジルへは1956年のパラナ州ウムアラーマ北方セーラ・ドス・ドラードスへの第1次入植（17人）を皮切りに、計326人が渡った。

同青年隊員の平均年齢は現在80代半ばだ。◆

## 月例会（8月）報告

会長 渡辺進

開催日：8月9日

開催地：ディアデーマ郡の曾我義成さん（4期）のRIMOBROCO社内

出席者：曾我義成さん、早川量道さん、貝田定夫さん、渡辺進でした。

議題：

- 1) 8月24日の慰霊祭の段取りと役割分担。
- 2) 来年は南米産業開発青年隊の70周年になりますが、大々的な行事は無理なので、総会新年会と70年祭と合わせたらどうかという意見が出ました。話し合いの結果、無理のない形で、仲間内で70年を祝ったらどうかということになり、出席者は皆さん賛成でした。
- 3) 出席できる方は会報の最終頁の連絡用メールあるいは電話で連絡をお願いします。そして家族を含めての出席者を把握し会場を決める。

私が思ったことは新年会総会と70年祭を無理なく皆さんでお祝いすることができる、大変良いアイデアではないかと思えます。



月例会 8月9日（土曜日） 曾我さんの事務所にて



## 月例会（9月）報告

会長 渡辺進

開催日：9月20日(土)

開催地：ディアデーマ郡の曾我義成さん（4期）のRIMOBROCO社内

出席者：曾我義成さん、長田譽歳さん、早川量道さん、渡辺進でした。

議題：

1) 南青協便り234号の会計、慰霊祭の会計、ともに了承されました。

2) 南青協70周年記念大会を会報等で知らせるのは、会場が決まってからにすること。

3) パラナの先輩方への事前相談は、うまくいきませんでした。

長田さんから藤岡さんに連絡していただくということで進めていくことになりました。



## 月例会（10月）報告

会長 渡辺進

開催日：10月11日(土)

開催地：ディアデーマ郡の曾我義成さん（4期）のRIMOBROCO社内  
出席者：曾我義成さん、盆子原国彦さん、長田譽歳さん、早川量道さん  
渡辺でした。

議題：

- 1) 9月の会計は承認されました。
- 2) 来年（2026年）の総会、新年会は2月22日（日）を予定する。会場は山形県人会館か宮崎県人会館。早川さんに予約をお願いする。
- 3) 先月の例会での、総会、70周年を一緒に行うという案は、会場の確保が難しく廃案とする。来年の総会でもう1度皆さんの意見を聞くということになりました。



## 戦争のこと

ポルトガル 10期 岡井よししげ

2025年8月現在、テレビをつければ、ロシアとウクライナの戦争、イスラエルによるガザでの大量虐殺、森林火災、そしてサッカーの場面が繰り返し映し出される。特にガザにおけるイスラエルの残虐は目を覆うばかりであり、すでに5万人以上の民間人が犠牲となっている。都市は徹底的に破壊され、飢えた人々がわずかな食べ物を求めても、イスラエルは食料の搬送を妨害し、パレスチナ人そのものを抹消しようとしているかのようである。

飢えの中で毎日何十人もの人々が命を落とし、とりわけ子どもたちが栄養失調でバタバタと死んでいく、また骨と皮ばかりの姿となり、死を待つ光景は、人間の心を深くえぐり、憤りを覚えずにはいられない。それにもかかわらず、ネタニヤフ首相は「それはフェイクであり、世の中の同情を買うための嘘だ」と言い放つ。これほどまでに非人間的で、畜生以下の振る舞いがあるだろうか。

一方、ロシアのプーチン大統領、ウクライナのゼレンスキー大統領も同罪である。戦争が1週間長引けば7千人もの命が失われると言われる現実の前で、罪なき子どもや両親たちが次々と虐殺されていく。今の世界は、あまりに残酷で、そして人間性を失った権力者たちの犠牲の上に成り立っている。

昭和14年生まれの「よっちゃん」は、戦争中に空襲が激しくなった青森市を離れ、母の弟、すなわち叔父のいる山形県の楯岡村山地区へと疎開した。母には7人の兄弟姉妹があり、長女を筆頭に4人続けて女、次いで男が二人、そして最後にもう一人女。叔父は長男として家督を継ぎ、畑作を営み、小作人も抱えてそれなりに恵まれた暮らしをしていた。

その家に、「よっちゃん」を含む5人の甥姪が身を寄せることになったのだから、叔父一家にとっても大きな負担だったに違いない。

両親は、子供たちの世話を託すため、叔父に相場の三倍ものお金を渡し「どうか面倒を見てください」と念を押したという。しかし現実には厳しく、「よっちゃん」の記憶には「腹を空かせて過ごした日々」が今も焼き付いている。食卓に並ぶのは、ご飯が茶碗に一杯、小さな鰯が一匹、たくあんの薄切り数枚、そして味噌をほんの少し溶かしただけの汁に大根が浮いていればご馳走であった。育ち盛りの子供にとっては到底足りるはずもなく、空腹感はいつも付きまとった。



叔父家族は別な部屋で結構美味しいものを隠れて食べていた。

あるとき、近所の子供たちと山へ分け入り、松の木に穴を見つけた。針金を差し込むと、中から松虫が這い出てくる。それを捕まえて火で炙り、口に入れたときの香ばしい匂いとほんのりとした甘みを、「よっちゃん」はいまも思い出す。誰に教わったわけでもないが、生きるための知恵だったのだろう。後になって聞いた話では、松虫を食べるのは子供の「疳の虫」にも効くと言われていたらしい。だから今でも丈夫なのかも知れない。

戦後はどこでも同じように食糧難であり、子供も大人も皆、空腹と向き合わざるを得なかった。「よっちゃん」は、田んぼでイナゴを捕まえて佃煮にし、夢中で食べたこともある。いまでは土産物として売られているが、当時の子供にとっては贅沢な珍味ではなく、ただ「飢えをしのぐための糧」にすぎなかった。今の世の中でこれだけ食べ物に恵まれているのに昆虫食でコオロギを食え！バカを言えと言いたい。

あの時代は、食べ物を求めて工夫し、飢えに耐えながら日々を生き抜くことが、子供にとっての遊びであり冒険でもあったのだ。

思い出すたび、戦争が子供の笑顔までも奪うものだったことを痛感する。

両親は青森市で手広く商売を営み、それなりに成功を収めていた。やがて大きな家を新築し、家族の希望も膨らんでいたが、戦時下の世の中は無情であった。戦争が激しさを増す中、大きな木造家屋は「空襲時には瞬く間に炎上し、延焼を広げる危険がある」として、強制的に取り壊される運命にあったのである。ついに父の大切な家も、人の手で壊されてしまったのです。

父はそれ以前、横須賀の海軍港に勤め、軍の世話係として一生懸命に尽くしていた。海軍はすでに敗戦の気配を察しており、戦況が悪化するにつれて、世話係の人々は次々に帰郷を許された。父もその一人として青森に戻ってきたが、間もなくして新築した家を取り壊されることになったのは、大きな衝撃であったに違いない。

それでも父は、「空襲で焼かれてしまうより、自らの目で壊されるのを見届ける方がまだ良い」と、自分を慰めながら静かに見守っていたのだろう。海軍での勤務経験から、空襲の到来はある程度予想できた。父は「もし焼き出されても、家族が路頭に迷わないように」と心を砕き、可能な限りの商品や生活必需品を地下に埋め、五年は暮らしていける備えを整えた。炎にのまれる未来を想像しながら、家族を守るためにできることを、必死に実行していたのである。

やがて、とうとうその日が来た。サイレンがけたたましく鳴り響き、空襲警報が夜の闇を切り裂いた。人々は身を潜め、息を殺しながら恐怖に震えた。間もなく上空にはB-29の編隊が現れ、容赦なく焼夷弾を降らせた。記録によれば、この時の空襲はB-29およそ62機によるもので、投下された焼夷弾は実に約83,000本。青森市街の88～90%が瞬く間に炎に包まれ、木造家屋は次々と火の粉を浴びて燃え広がった。

まさに、現在のイスラエル・ガザで見られるような徹底的な破壊であった。住民の被害は甚大で、死者は1,000人から1,500人とも言われ、重軽

傷者や罹災者は数万にのぼったという。街は地獄のような炎の渦に呑み込まれ、叫び声と泣き声が夜空に響き渡った。

父が苦心して備えた「5年分の生活物資」も、守り抜こうと地下に埋めた商品も、そのすべてが一瞬にして爆撃の炎に吹き飛んでしまった。家族を思い、未来を守ろうとした努力が、米軍の爆弾によって一瞬にして灰となったのである。その光景を思い返すと、胸が締めつけられる。生きるための備えも、大切な家も、街も、すべてを呑み込んでいった空襲の炎。その無情さを、父は今も忘れることができないだろう。

さて両親は、戦後焼け野原でどうして生きていくか途方に暮れていましたが、戦火から取り残されていた町外れを歩いていたとき、ある商店の主人から呼ばれて「どうしているか」と安否を気遣ってくれました。両親が「このように無一文になって途方に暮れているところです」と答えると、その主人はこう言いました。

「それなら私たちの商品を買ってください。戦前はあなたのおかげでとても助かったことがあるのですよ。あの頃、私たちの商品を買っていつも現金払いしてくれたのがあなたでした。本当に助けられたのです」

そう言って、取りあえず鼻紙を幾らでも持って行ってくださいと差し出してくれました。父が「お金がない」と言うと、「な～に、それが売れてから払ってくださればいいですよ」と、とても親切に言ってくれたのです。

その行為に感謝し、父は早速人の集まっている闇市に行きました。すると右から左へすぐに売れてしまいました。戦後は何もない時代でしたから、あれば何でも即座に売れました。それもインフレが激しかったため、何倍も吹っかけても飛ぶように捌けたのです。ですから卸してくれた商人も喜び、ましてや父も寝るのを忘れて商いに没頭しました。そのおかげで、私たち子供が租界から帰ってくる頃には、小さな家まで建てていました。

続く

次ページからは本記のポ語訳です。

## Referente as Guerras

Portugal, Yoshihiro Okai (10ª turma)

Em agosto de 2025, ao ligar a televisão, repetem-se cenas da guerra entre a Rússia e a Ucrânia, do massacre em massa cometido por Israel em Gaza, de incêndios florestais e de partidas de futebol.

Em especial, a brutalidade de Israel em Gaza é de tal modo hedionda que é impossível não desviar o olhar: já mais de 50 mil civis perderam a vida. As cidades foram totalmente destruídas, e mesmo quando as pessoas famintas tentam conseguir um pouco de alimento, Israel bloqueia o transporte de víveres, como se tivesse a intenção de eliminar por completo o povo palestino.

Na fome, dezenas de pessoas morrem todos os dias, sobretudo crianças, que vão tombando uma após outra, vítimas da desnutrição. Seus corpos transformam-se em pele e ossos, aguardando a morte. Essa visão dilacera o coração humano e desperta uma indignação insuportável.

Apesar disso, o primeiro-ministro Netanyahu ousa afirmar: *“Isto é falso, trata-se de uma mentira para comover o mundo e atrair simpatia.”* Pode haver atitude mais desumana e inferior à de um animal?

Do mesmo modo, o presidente russo Putin e o presidente ucraniano Zelensky são igualmente culpados. Diz-se que, para cada semana em que a guerra se prolonga, cerca de 7 mil vidas são perdidas. Diante dessa realidade, crianças inocentes e seus pais são massacrados sem cessar. O mundo atual é cruel em excesso e se ergue sobre os sacrifícios impostos por governantes que perderam toda a humanidade.

Nascido em 1939 (ano 14 da era Shōwa), Yocchan deixou a cidade de Aomori, cada vez mais atingida por bombardeios, e foi evacuado para a região de Tateoka-Murayama, em Yamagata, onde vivia o irmão mais novo

de sua mãe — seu tio. A mãe tinha sete irmãos: a filha primogênita, seguida por mais três mulheres, depois dois homens e, por último, mais uma mulher.

Esse tio, sendo o filho mais velho, herdara a casa, cultivava os campos, tinha meeiros e vivia relativamente bem.

Naquela casa, vieram abrigar-se cinco sobrinhos, incluindo Yocchan. Não há dúvida de que também para a família do tio isso foi um grande fardo.

Seus pais, a fim de garantir os cuidados das crianças, entregaram ao tio uma quantia equivalente a três vezes o valor de mercado, pedindo insistentemente: *“Por favor, cuide deles.”*

Mas a realidade foi dura. Na memória de Yocchan permanece até hoje a lembrança de “dias passados com fome”. Na mesa, quando havia uma tigela de arroz, um pequeno sardinha, algumas fatias finas de rabanete em conserva e uma sopa rala de miso com alguns pedaços de nabo, isso já era considerado um banquete.

Mas A família do meu tio estava a comer algo delicioso noutra sala.

Para uma criança em fase de crescimento, era totalmente insuficiente, e a sensação de fome nunca os abandonava.

Certa vez, junto com crianças da vizinhança, entrou na montanha e encontrou um buraco num pinheiro. Ao enfiar um arame, dele saiu um besouro-do-pinheiro. Capturaram-no, assaram-no no fogo e, ao levá-lo à boca, o aroma tostado e o leve sabor adocicado ficaram gravados para sempre na memória de Yocchan.

Ninguém lhes ensinara, mas era um instinto de sobrevivência. Mais tarde, soube-se que comer esses insetos era considerado um remédio contra os “vermes da irritação” das crianças. Talvez por isso ainda seja robusto até hoje.

No pós-guerra, em toda parte havia escassez de alimentos. Adultos e crianças não tinham escolha senão enfrentar a fome. Yocchan também apanhou gafanhotos no arrozal, preparando-os em conserva doce (*tsukudani*) e devorando-os com entusiasmo. Hoje, são vendidos como iguaria, mas para as crianças daquela época não passavam de um simples “alimento para afastar a fome”.

Atualmente, quando há tanta fartura, obrigar as pessoas a comerem grilos como “comida do futuro” é um absurdo!

Naquele tempo, buscar alimentos, inventar formas de sobreviver e suportar a fome era, para as crianças, uma espécie de brincadeira e aventura. Ao recordar, percebe-se como a guerra foi capaz de roubar até mesmo os sorrisos das crianças.

Seus pais tinham um negócio próspero em Aomori e haviam obtido relativo sucesso. Chegaram a construir uma grande casa nova, e a família alimentava esperanças. Mas o tempo de guerra foi implacável. À medida que os combates se intensificavam, as casas de madeira eram consideradas um risco de incêndio imediato em caso de bombardeio, e assim foram condenadas à demolição forçada. A nova casa de seu pai teve o mesmo destino: foi destruída pelas mãos humanas.

Antes disso, seu pai trabalhara no porto naval de Yokosuka, servindo à Marinha como assistente. Já se pressentia a derrota, e à medida que a situação militar piorava, os auxiliares eram dispensados e enviados de volta para casa. O pai também voltou a Aomori, mas logo enfrentou o choque da demolição de sua recém-construída casa.

Ainda assim, ele dizia a si mesmo: *“É melhor vê-la ser destruída diante de meus olhos do que vê-la queimar num ataque aéreo.”* E permaneceu resignado.

Graças à experiência na Marinha, previa a chegada dos bombardeios e, preocupado com a sobrevivência da família, enterrou no subsolo mercadorias e bens essenciais, suficientes para viver cinco anos. Era sua forma de se preparar contra o inevitável fogo.

Mas o dia fatídico chegou. A sirene ecoou ensurdecadora, cortando a escuridão da noite. As pessoas se esconderam, tremendo de medo. Logo, formações de B-29 surgiram no céu e lançaram indiscriminadamente bombas incendiárias.

De acordo com registros, participaram cerca de 62 aviões B-29, que despejaram aproximadamente 83.000 bombas incendiárias. Em instantes, 88 a 90% da cidade de Aomori estava em chamas, as casas de madeira ardiam uma após a outra.

Foi uma destruição tão completa quanto a que hoje vemos em Gaza. As perdas humanas foram enormes: entre 1.000 e 1.500 mortos, dezenas de milhares de feridos e desabrigados. A cidade mergulhou num inferno de chamas, ecoando gritos e lamentos.

Os “suprimentos de cinco anos” que seu pai cuidadosamente escondera no subsolo também foram consumidos em um instante. Todo o esforço para proteger a família reduziu-se a cinzas sob as bombas americanas. Essa recordação ainda hoje aperta o peito. A preparação, a casa, a cidade — tudo engolido pelo fogo. Seu pai jamais poderia esquecer tamanha crueldade.

Após a guerra, seus pais, perdidos no meio das ruínas, não sabiam como sobreviver. Certo dia, caminhando pelos arredores ainda intactos da cidade, foram chamados por um comerciante que lhes perguntou como estavam.

Ao ouvirem que estavam “sem nada e em total desamparo”, o comerciante respondeu:

*“Então vendam os nossos produtos. Antes da guerra, vocês nos ajudaram muito. Naquele tempo, compravam nossos produtos sempre pagando em dinheiro vivo. Fomos realmente salvos por isso.”*

E ofereceu-lhes pacotes de lenços de papel, dizendo: *“Levem quantos quiserem. Paguem depois que venderem.”*

Agradecido, seu pai foi imediatamente ao mercado negro. Lá, tudo se vendia rapidamente de mão em mão. Como a inflação era severa, os preços podiam ser multiplicados várias vezes, e ainda assim a mercadoria sumia. Assim, tanto o comerciante quanto seu pai ficaram satisfeitos. Ele passou a dedicar-se dia e noite ao comércio, esquecendo até de dormir. Graças a isso, quando os filhos regressaram do refúgio, já havia conseguido construir uma pequena casa.

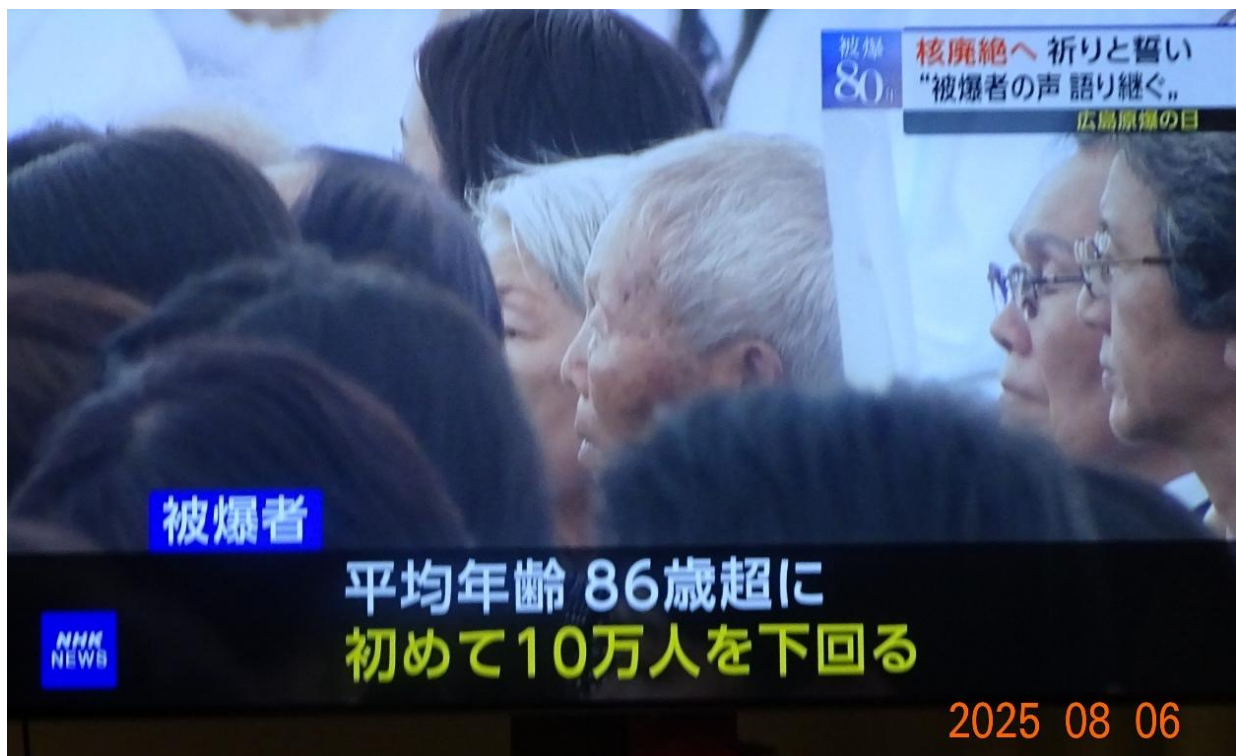
Continua. 

## 広島平和記念式典と参列された盆子原国彦さん（6期）

8月6日、広島市中区の平和記念公園で平和記念式典（原爆死没者慰霊式・平和祈念式）が開催されました。



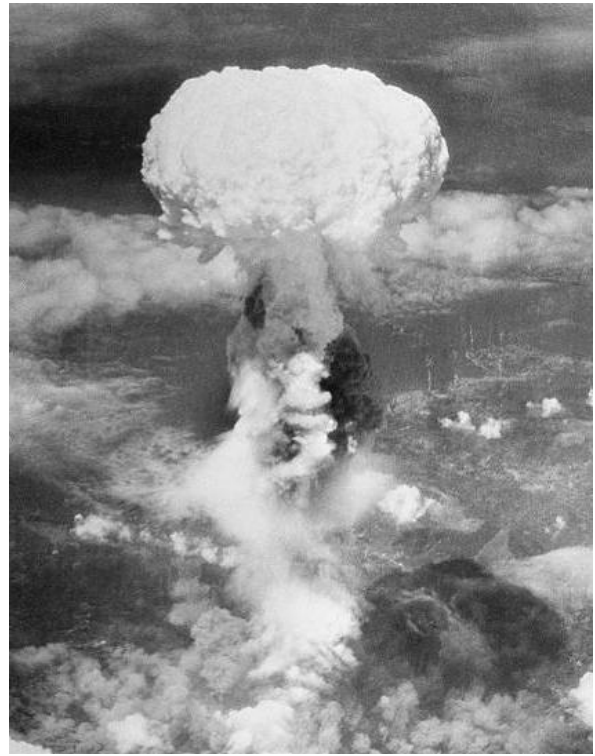
平和記念式典の NHK テレビニュースの画像です。



中央に居られるのは式典に参加された盆子原国彦さん（6期）です。



1945年の広島と長崎への原爆投下関連の写真です



1945年8月6日広島に、9日長崎に原爆が投下されました。  
下は現在の写真です



広島原爆ドーム（広島平和記念碑）



長崎平和祈念像



2025年「駆け抜けた8月」「被爆80周年」

## 広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

サンパウロ 6期 盆子原国彦

上記の式典を2025年8月6日広島市の平和公園内で開催するので、ブラジル在住の被爆者代表2名、遺族代表2名を推薦するよう要請を受けました、但し書きに「在ブラジル原爆被爆者の会」会で働いた事のある人との事で、被ばく者2名付き添いも含めて4名、遺族代表1名を推薦して広島市にお返事をした。

私の場合、被爆者代表として、妻が付き添いで認められ、早速航空券を購入の手続きで日本航空とアメリカン航空が共同運航している、アメリカのダラス空港を経由して日本に行く便の購入をと思い、アメリカ入国のため、妻はVIZAがあるので問題はなかったのですが、私はESTAという書類を出して審査してもらったところ、許可が下りず、2019年に日本に行くとき許可が下りた、その書類をもう一度コピーして送ったけど、アメリカ入国許可はおりず。急いでドバイ経由のエミレート航空で、関西航空に到着する便を探し、それに決めました。

もう一人被爆者代表の渡辺淳子様（ノーベル平和賞授賞式にブラジル代表として出席された）方は、7月初めにピースボートにニューヨークで乗船されて、船内で被爆体験などの発表などされながら、コスタリカで下船されブラジルに帰られる予定でしたが、コスタリカに下船した後体調を崩し、救急車で病院にそく入院され一周間で退院され、体調を戻すためにホテルで休養され、その後息子さんがブラジルからコスタリカまで迎えに行かれブラジルに帰られました、広島への慰霊行事出席はドクターストップで行けなくなりました。

遺族代表は昨年8月100歳でお亡くなりになった、ブラジル被爆者協会を1984年に立ち上げずっと会長を続けてこられた、森田隆様の娘さん、斎藤ヤスコ様が決まりました。

エミレート航空の航空券はエゼクチーボでしたので、出発の日は、航空会社が出発4時間前にメルセデスの防弾車で迎えに来てくださり、空港に着くと出発前の事務処理も早くすまされ、サーラヴィプに入り出発前の時間を食事飲み物などすべて自由で、よい時間を過ごすことが出来ました。

航空機は2階建てで、今世界で運航している旅客機で一番大きい航空機だそうで、エゼクチーブと一等席は2階で、席は長く寝られるようになっていて、機内には飲み食い自由のバーまでありました。

8月2日（土） 関西航空到着、（この空港の土木工場の現場で6期生の小沢進さんが45トン積みのダンプで仕事されていました、私の兄も広島で埋め立て専門の土木会社で働いていたので、よく呼ばれて指導していた話しをしていました）。

空港にはこの旅の全工程を助けて下さるように契約した外語大の博士課程で勉強されている相原由奈様が待っていてくださいました。彼女の案内で関西空港から特急と新幹線を乗り継いで広島へ。 広島駅で広島市職員がお出迎え、宿泊先である ANA クラウンプラザホテル広島にチェックイン。私はこのホテルには1995年に宿泊したことがあるが、あの時は新築でもっと派手やかな感じがしたのだが。

8月3日（日） 午前中は休息、荷物の整理など、お昼は大手町の蕎麦屋さんに列に並んでまつ、店の中は日本風で久しぶりのそばは美味しかった。昼食後斎藤さんと合流、NHK からブラジルで取材を受けた時渡していた写真を受け取る。16時ごろ広島市と打ち合わせ夕食は舟入幸町の回転寿司スシローへ、寿司も、茶わん蒸しも美味しかった。

8月4日（月）

広島市の公式行事（広島市長と、韓国の代表団、米国の代表団、ブラジルの代表団などと挨拶を交えへて懇談会）

夕方、私の原爆で亡くなった13歳の女学生だった姉のことを、1年前から調べて探して下さった長崎 TV.の橋場紀子様取材を受ける。これは私の母と姉が原爆で亡くなったのですが、母の事は父から聞きましたが姉の事は父も話してくれず、あの当時学童疎開をしていて生き残ったもう一人の姉と兄も話してくれず、3人ともその後広島で生活していて癌で死亡し、姉の事は全然わからないで、そのままになっていました。

2021年「証言2021」という本に私の被爆体験が発表されました。その時の長崎の証言会の仕事をされていた、橋場紀様が私の取材をして下さいました。その時私は姉の事を話し、いまだにどこの学校で勉学していて死亡したのかわからないと話したのがキッカケで、本が出版され

た後も、橋場様は広島に何度も訪れ多くの学校などを訪れ調べて下さり、私も父の戸籍謄本を調べた結果、母と姉の死亡など記載されていないので、甥に父の昔の戸籍謄本がある東京の渋谷市役所に行ってもらい、母と姉の2人だけの死亡謄本があるのを探し出してもらい、この謄本を橋場さんに送り、どこの学校でどこの場所で原爆のために死亡したのか判明した。今回橋場様が私を取材してそれを証明してくださいました。今まで80年間わからなかった姉の死の事実がわかり、私の胸の中で、喜びが沸き起こってきた。本当にありがとう！！

8月5日（火） 広島市の公式行事（6日の行事の予行練習）公式行事の合間の自由時間に姉の通っていた第二国民学校（今の観音中学校）の追悼式に初めて参加、校長先生はじめ、多くの生徒さん、遺族の方々も参加され、私も80年ぶりに献花することが出来ました。

8月6日（水） 朝7時から式典に参加、私もブラジル被爆者代表として、ブラジルに移住してお亡くなりになった被爆者の方々の事を思いながら献花致しました。

式典が終わった後人々が去った式典会場で数名の報道陣から取材を受けました。昼食を食べた後、広島県庁を訪問衛生局長と今後のブラジル在住被爆者の援護について要請をする。その後YMCA会館で開催されていた原爆被爆者相談員の会の集會に顔を出す、ここでも挨拶をするようにとの事で簡単にブラジルの現状を話しましたが、広島にブラジルの被爆者が治療に来た時、お世話になった方々ばかりでお礼の言葉しか出ませんでした。

8月7日（木） 斎藤さんおご主人と合流し長崎へ移動。

乗り換えの長崎新幹線の武雄温泉駅で私達の乗るはずだった新幹線が時間から消えて、予定より1時間ほど遅れて長崎に到着、長崎で我々を支援して下さるえり子さんと米澤さんがお出迎え、宿泊先であるJR九州ホテル長崎にチェックイン。路面電車で被爆者コミュニティーセンター（松山町）に移動して「友の会」主催の交流会－歓迎会に参加。

8月8日（金） 長崎県庁訪問。衛生局長にブラジル在住の長崎で被爆された方がたの現状とこれからの援護について相談する。11時半ごろ、長

崎県美術館で展示を行っている、新平さん、ゆみさん夫妻と合流、新平さんたちと一緒にランチ（新平さんはメキシコ在住で2008年ブラジルで広島から送られた原爆資料をサンパウロの移民博物館で展示するとき来られてコーディネーターをされた方、奥さんのゆみさんはドイツに在住、今まで3回にわたり。ブラジルの被爆者の方々を訪ね映像を撮影されています、メキシコでは有名な芸術家です）。14時、原水禁世界大会分科会で、相原さんの司会で私が問いに答えるという形式で、南太平洋でアメリカが原爆実験をして、その影響で住んでいた島から追い出された原住民のお孫さん、長崎に原爆が投下された時オランダ人で捕虜として連れてこられていて、たまたま原爆が投下された時鹿児島に送られていて命が助かった方のお孫さんも交えての原爆と放射線にかんする公聴会に出席。その後長崎市役所を見学、一眼鏡橋—中華街（夕食は中華街で）

8月9日（土）朝から土砂降りの雨、式典会場に行くのにくるぶし迄水につかって歩く、式典に参列、式典でピースポート代表の川崎さんに会い。渡辺様のコスタリカでの病気の事についてお礼を述べる。式典後、爆心地公園によって、ホテルに帰って着替え、あみゆうぷらざホテルで昼食夜は韓国の高校生たち・李てじゅ先生・ごぬさん親子も一緒にお食事、李先生の息子さんは韓国の平和大使として日本の高校生平和大使と一緒にジュネーブの国連本部に原爆反対の署名運動に参加し集めた署名を届けられた。ブラジルにも大学入学を祝ってこられブラジルの高校生と交流された。

8月10日（月）午前中長崎観光（えりこさん、橋場さんご家族と一緒に）諏訪神社で昼食。長崎造船所の戦艦武蔵などが建造されたドックを坂の上から見学。長崎市を訪問（長崎市から招待されていた石橋様ご夫妻と一緒に、長崎市長と被爆者の援護について要請など話す。3時半ごろ長崎を出発、博多につき大雨のため九州新幹線が止まり、広島に行けず、ホテルを探すもどこも満員、長崎の支援者の方が捜して下さった一部屋とサーラの付いたアパートに5人で止まる。

8月11日（火）7時半ごろ宿を出て博多駅で新幹線の広島行きを手配、10時ごろ博多駅を出発。広島の支援の会の歓迎会会場には11時半ごろに遅れて着く、皆さん待っていて下さる。懐かしい顔、顔、本当にこ

の方たちと交流が続いていることが夢のよう。その後広島市弁護士会長の足立先生と中谷さんと一緒に昼食（中華料理店で）、私と妻と、相原さんは宿泊先の APA ホテル広島駅前大橋へ、斎藤さんご夫妻は廿日市の親戚のお家に。

8月12日（水） 11時半ごろ、広島県庁の元従業員八幡さん、福原さん、今県庁で働いている川本さん、世良さんと昼食会、 14時広島県医師会訪問。その後駅ビルでお買い物。

8月13日（水）午前中はホテルでのんびり。午後縮景園へ、原爆の日この場所に水を求め、救いをもとめて集まった人が数万人、18時広島県医師会の方々、（広島県医師会会長松村誠先生、鎌田七男先生、檜山桂子先生、上河内和子さん）と夕食会、興味深い遺伝子の事など聞くことが出来た。

8月14日（木） 私の親戚兄は亡くなったけれどその家族の皆さんと、父母の墓参り、食事会などで1日過ごす。

8月15日（金） 6期生の三戸さんご夫妻と会いカフェーと昼食。三戸さんは今年四国で行われた全国マージャン大会で17番になったとの事、広島での選考会では1番、全国130名の人達が競い合った会で17番とは、年齢86歳を考えると大変良い成績だと思うけれど、三戸氏と会って少しして老人性健忘症が出始めている感じを受けたが、元気そのまま出会えてよかった。

8月16日（土）午前中もう一度三戸氏夫妻と会う LINE でつながるため、夕方ホテルの周辺を散歩する。暑い！！！！

8月17日（日） 11時半ごろ広島から新幹線で品川へ、兄の家族のみんなが見送ってくれる、15時半ごろ品川着、品川東武ホテルにチェックイン。

8月18日（日） 10時、日本被団協の事務所を訪問、ブラジルの渡辺淳子さんがノーベル賞授賞式に出席させていただいたお礼をする。

東京駅で昼食、15時ピースボートの事務所を訪問、私は2010年にピースボートに乗船し世界を一周したのだけれど、今回 NHKTV で、広島での式典の様子の中で私の顔が画面に映され、それを見た当時の同船者がピースボートに電話をかけ、もし来たら電話で話したいとの申し込みが有

ったので、コンピューターで画面を見ながら話してくださいと、準備して  
くださっていて、懐かしい皆様と話が出来ました。

本当に思いがけないことでした。

8月19日（火） 11時半ごろ、東京の支援の会の方々と昼食会、2  
002年初頭から日本に要請の時、何もわからない私たちを親切に案内な  
どして下さった方々、お会いできお互いに歳は取っていますが、ありがた  
かったです。その後買い物に新宿へ、斎藤さんご夫妻と一緒に夕食。

8月20日（水） 11時ホテルチェックアウト、向かいにあるグランド  
プリンスホテル新高輪のカフェで休息、13時東京芝豆腐屋うかいで昼  
食・テータム（この豆腐屋うかいは東京タワーの真下であり都会の喧騒  
も聞こえない大きな日本庭園の中に建つ日本家屋がお店で、和服を着た女  
性の方々が給仕をして下さる、素晴らしい日本料理のお店でした。このお  
店の予約は、私たちにこの旅行中付き添ってくださった相原様のお母様が  
予約して下さったそうで、日本最後のいい思い出になりました。18時ご  
ろホテルに戻って空港への送迎車を待つ、19時ごろホテルを出発して羽  
田空港へ、20時半ごろチェックインをして出国ゲートへ、ドバイで乗り  
換えてサンパウロへ15時間の旅、グアルリョス空港で、税関とか、入国  
手続きなど済まして、外に出ると航空会社のリムジンが待っていて、その  
まま家に帰りました。（この送り迎えは、空港から50km以内、サンパ  
ウロと羽田空港で利用できます、但しエゼクチャーボクラスだけです）。  
長旅を付き添って下さった相原様有難うございました。



## 大久保俊輝先輩の講話を聴いて

富士宮市 産業開発青年隊同窓会長 鈴木 浩明

7月25日、静岡岳南モラロジー事務所主催の、講演会に参加してきました。講師は、公益財団法人モラロジー道德教育財団特任教授・学校教育支援センター長の大久保俊輝講師です。テーマは「課題解決のできる道德力の演習」でした。大久保講師は、昭和50年度産業開発青年隊1年次中央隊卒業の、私たちの同胞です。

中央隊を卒業され、通信大学を卒業され、教師となった先輩です。講演の始まりに、中央隊のときの話をさせていただきました。当時は、最長三年の教育課程での修了で、上下関係の厳しい全寮生活の中、一年間の教育訓練のみの卒業ですので、理不尽の極みを知ったとお話しされました。私も、やはり中央隊の時の理不尽さを、体験させていただきました。

- 講演の中で、私が共感したことがあります。1. 理不尽さの体験  
2. 失敗を恐れぬこと 3. 相手の良いところを理解すること。  
4. いただきますは、あなたの命をいただきます。この四つです。

1. はこの世の中は理不尽なことが多々あり、そのことによりつぶされてしまうことがあります。生徒の登校拒否や、自殺もその一つではないでしょうか。それを知っているからこそ、苦しんでいる生徒の気持ちを察し、適切な指導を行うことができるのだと思います。家庭の中でも全く一緒だと思います。

2. は、失敗を恐れていれば、行動することができなくなります。失敗という種をまくことにより、痛い思いをすることもあると思いますが、その失敗を活かし、次には、成功の種をまくことができるのだと思います。よく、目に見えぬ力にすぎる人がいますが、目に見えぬ力も、種がなければ、芽を出させることはできないのではないのでしょうか。勇気をもって行動することだと思います。

3. は、相手の欠点を見つけることは、簡単です。良いところを探すためには、よく観察し、会話をし、よく知ることだと思います。それにより、相手の存在を、認めることができるのではないのでしょうか。

4. は、人間が生きていくためには、命をいただいていることを知ること。すべての、食べ物には、多くの命がかかわっています。人間が生きていくためには、ほかの命が必要であり、その命と引き換えに生かしていただいていることを知らなければならぬと思います。生きているのではなく、生かしていただいていることに感謝を知ることが重要だと思います。命の尊さを知ることにより、幸せに生きること、平和について考

えることができるのではないのでしょうか。共存共栄の価値を知ることができるのだと思います。

講演の中で、日蓮聖人のお話が出てきました。日蓮聖人は、決して、自分を考えず、相手を考え、行動してきたひとだと、お話をしていただきました。菩薩行を実践され、日蓮大菩薩とも称されています。鎌倉の時代、禅宗や、念仏宗が武士や、高貴な地位の方々に信仰され、寺社を寄進され、栄華を誇っていました。そのような時代に現れたのが、日蓮聖人です。当時は、までは考えられないほど多くの理不尽なことがあり、一般の人々は、安心して生活をするのができなかつたのではないのでしょうか。このような時に、どのように幸せを見つけることができるのかを、論じていかれたのだと思います。

道徳の考え方の中に、近江商人の三方よしの考えが、含まれています。「売り手よし」「買い手よし」世間よし」を「自分よし」「相手よし」「世間よし」と理解し、自分や相手のことだけでなく、世の中全体に、幸福を与えるためには、何をすべきかを考えさせるのが、道徳教育であると、今回の公演で、知ることができました。

現在仏教の宗祖といわれる方々は、比叡山で修行されています。また、近江商人の近江八幡市と、比叡山は、琵琶湖を挟んで対岸にあります。

比叡山を開いた伝教大師最澄は、「忘己利他」と表しています。おのれを忘れて、他を利するは、慈悲の極みなりといわれています。

自分のことはさておいて、まずは、他の人に喜んでいただく。そこに幸せがあるという、考え方です。しかし、それで終わるのではなく、その行動によって、必ず、自分に幸福が戻ってくるということではないのでしょうか。この世の中は、理不尽であっても、他の人に対する、思いやりの行動を、忘れてはいけないということだと思います。

そこには、他の人の目があり、結果、良い報いとして、自分自身に戻ってくるものではないのでしょうか。そして、命を大切にし、相手をよく観察し、良いところを認め、共存共栄を図ることが、大切なことだと思います。

今回、大久保先輩の講演を通じて、また知識が広がり、幸せに感じています。ありがとうございました。

また、今回の講演に参加していただいた、青年隊同窓会の皆さん、講演会に参加された、皆さん、会場準備に汗をかき、もてなしていただいた、静岡県岳南モラロジー事務所の皆様方、ありがとうございました。

次の2ページにパンフレットと当日の写真を添付します。

公益財団法人セラロジー道徳教育財団主催  
 道徳教育研究会  
**研修としての教育力・人権力を高める**

公益財団法人セラロジー道徳教育財団主催の道徳教育研究会研修会。16年に「教育とは、心身の成長を促すことである」との信念のもとにはじまりました。研修は全員の「心」を育て、心豊かに力を生み出す力を養成することこそ、国の明るい未来を築くことと信じています。研修は国の未来であり、国家治平の計は教育にあります。当研究会は豊かな人間性を育む「心の教育」の発展と充実を求め、「道徳教育の充実をめざして」を共通テーマとして全国で開催いたします。

日 時 令和7年7月25日(金) 12:00 受付  
 13:00 開会

開催場所 富士宮市万野原新田4136-6  
**富士宮市大富士交流センター**  
 電話 0544-22-0024

公益財団法人セラロジー道徳教育財団  
 特任教授・学校教育支援センター長  
 おおぐぼとしさ  
**講演 大久保俊輝 講師**

テーマ **「課題解決のできる道徳力の演習」**

参加費用 **1,000円** (送料別)

申込 静岡県セラロジー事務局 富士宮市小泉484-5 事務局(若林倉) Tel.0544-22-2323  
**FAX 0544-22-8035 mail akisika@isis.ocn.ne.jp**

申込締切 研修申込書に記入の上令和7年7月7日(月)迄にFAX又はメールにてお申込み下さい

参加定員 **80名**  
 〒217-8654 千葉県柏市六ヶ丘2-1-1

主催 **公益財団法人セラロジー道徳教育財団**

後援 文部科学省  
 富士宮市・富士市・浜崎町・沼津市・御南町・小山町・各教育委員会




講演会パンフレット



講演会風景



志方夫妻、石川祐三先輩



菅井文明先輩、大柳さん



大久保俊輝講師（左から3人目）と聴講された青年隊関係者の皆さんです

松永泰然先輩もお盆の檀家周りでお忙しい中、参加していただきましたが、時間の都合上帰られたため、この写真撮影には同席できませんでした。



# 南青協月間会計報告（7月分）

2025年7月31日迄

Data	Descrição	Débito	Credito	Saldo
	先月よりの繰越分			23.009,09
17/jul.	年会費 4期興梶太平氏(86)2年分		400,00	
30/jul.	会報 234号 Copia	1.847,55		
31/jul.	会報 234号 Correio	871,60		
	Rendimento		154,24	
	Total	2.719,15	554,24	20.844,18

Bradesco の支店番号と口座番号		Agência 1480
Extrato Conta Corrente		Conta 33226-7
Takatoshi Osada		Takatoshi Osada
Agência 1480		CPF 698.506.588-00
Conta 0033226-7		CEP 04371-000
Disp. P / Poupança		
Saldo Total	20.844,18	

# 南青協月間会計報告(8月分)

2025年8月31日迄

Data	Descrição	Débito	Crédito	Saldo
	7月よりの繰越分			20.844,18
10/ago.	会報 234 号発送用封筒	57,00		
10/ago.	年会費 9 期貝田貞夫氏(260)		200,00	
10/ago.	年会費 1 次磯中晴子氏(01)		200,00	
25/ago.	年会費 8 期吉田大吉氏(221)		200,00	
25/ago.	年会費 8 期小島忠雄氏(236)2 年分		400,00	
25/ago.	慰霊祭読御布施	1500,00		
25/ago.	慰霊祭飲み物	200,68		
25/ago.	慰霊祭諸経費	63,99		
25/ago.	慰霊祭円光寺駐車料	220,00		
28/ago.	年会費 10 期平島征也氏(276)		200,00	
29/ago.	香典期佐野孝雄氏	300,00		
	Rendimento		111,23	
	Total	2.341,67	1.311,23	19.813,74

Bradesco の支店番号と口座番号 Extrato Conta Corrente Takatoshi Osada Agência 1480 Conta 0033226-7 Disp. P / Poupança		Agência 1480 Conta 33226-7 Takatoshi Osada CPF 698.506.588-00 CEP 04371-000
Saldo Total	19.813,74	

# 南青協月間会計報告

2025年9月30日迄

Data	Descrição	Débito	Credito	Saldo
	8月よりの繰越分			19.813,74
08/set.	Tarifa Bancaria	5,10		
31/set.	Rendimento		128,62	
	Total	5,10	128,62	19.942,36

Bradesco の支店番号と口座番号 Extrato Conta Corrente Takatoshi Osada Agência 1480 Conta 0033226-7 Disp. P / Poupança Saldo Total		19.942,36	Agência 1480 Conta 33226-7 Takatoshi Osada CPF 698.506.588-00 CEP 04371-000
--	--	-----------	---



今年も又8月がやって来た、そして又去って行った。当然の事であるが、何故かわびしい。8月は我ら日本人にとって建国以来最大の出来事が起きた月である。

今年は80年という、その大きな節目の年であるという事で、TVが何時になく大声を出しているような気がした。

毎年8月は、まず広島原爆から始まる。昭和20年の8月6日8時15分は、日本人の誰もが忘れられない日である。

今の若い人達には、それが何の日であるか知らない人も大勢いるに違いない。

あの日アメリカの、B29戦闘爆撃機が広島上空へとやって来た、多くの住民たちは「又来やがった！」と思う程度の認識だったであろう。それが新型爆弾を積んで、広島に投下するとは、誰が想像出来たろう。

そのB29が、広島街上空に差し掛かると、ものすごい爆音が鳴り響き、きのこ雲が舞い上がると、その眼下は瞬時に全てが焼土と化し、人が叫び、のたうち回り、家屋は焼け、当に地獄絵さながらの光景だったに違いない。

この広島に投下されたのは、ウラニウム型原子爆弾であった。続いて、9日には長崎に、プルトニウム型原爆が投下された。広島が世界初という事で、何時も大々的に扱われる。被害状態も広島の方が酷かったのか？私には知る由もないが、これでは長崎がちょっと可哀そうだ。

アメリカは新型爆弾を開発し、それをアリゾナの砂漠で実験し、威力はありさそうだが、そこで野ネズミやトカゲ等を殺しているのではなく、実際に街の中で、人々が住み生活を営んでいる、そこに落としてみたくなくなったに、違いない。

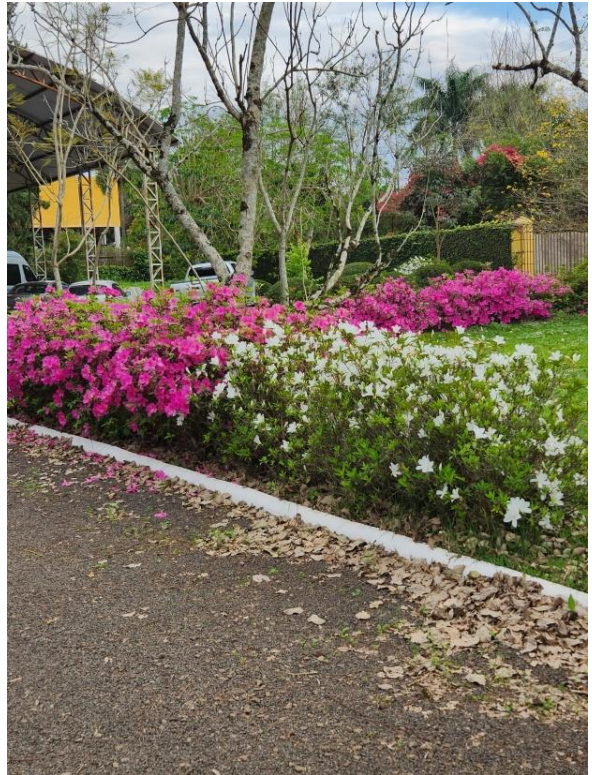
大統領トルーマンは、その誘惑に我慢できず、広島、長崎の原爆投下にゴーサインを出した。そしてその成果に大いに満足したに違いない。

8月になると、日本のすべてのチャンネルが、戦争に関するニュースや映画を流している。そして8月15日の終戦日には、自民党の議員たちが靖国神社参拝である。「敵を知り 味方を知れば 百戦 危うからず」という言葉があるが、「敵を知らず 味方も知らず 百戦九十敗」した戦争の指導者達の霊を祀っている神社に参拝である。

将官、佐官達の中にも、立派だった人達はおろう、しかし戦争は負けたのだ、この際全体責任で、将官、佐官達プロの軍人たちの霊は弔う事はないであろう。尉官以下の無名戦士の霊を、弔って欲しいものと思いますが。こんなことを考える、8月が俺には本当に鬱陶しい。では、庭でも散歩しようかな。

今年の初春はよく花が咲いた。5月頃は、私の庭でも4年物の2m程の桜の花が良く咲いた。6月は早くに霜が降り、紫のイッペーはほとんどが蕾だけで落ちてしまったが、7~8月には白、黄色のイッペー、寄生欄、それに何と言っても、ツツジが良く咲いた、赤、白、紫3種のツツジ、その下で錦鯉が元気に泳ぎ回ってる。





## トランプがルーラに鉄槌を下した

サンパウロ 9期 貝田定夫

8月の始め、アメリカはブラジルからの輸入品に50%の関税をかけることを発表した。アメリカはこれまで世界の多くの国に対して高い関税をかけてきたが、その中でも50%の関税は飛び抜けて高い。ブラジル政府は予想もしていなかったことに面食らってしまい、どうしたらいいのか分からない状態になっている。政府の高官が探りを入れてみたが、「この件はホワイトハウスの専権事項です」と言われ、門前払いにされてしまった。

アメリカが輸入品に高い関税をかけるのは、貿易赤字を解消して自国の産業を守ろうとするためである。ところがアメリカはブラジルに対しては貿易黒字であり、2009年から続いてきている。昨年アメリカの貿易黒字は280億ドルだったという記録がある。それならば、経済的にはブラジルに高い関税をかける理由は全くない。これは100%政治的な要因によるもので、世界的に見てもブラジルに対してのみの特例である。

アメリカが50%の関税をかけるに至った理由は何だったのか。ルーラ政権の外交政策がどうだったのか見るべきである。言い替えれば何がトランプを怒らせているのか見る必要がある。話を分かり易くするためにブラジル外交の具体的な例を次に述べたい。

- ・ルーラはBRICSの会合でドルに替わる新たな基軸通貨の創設を提言した。
- ・ブラジルは中国との友好を推進し反アメリカを鮮明にした。
- ・ルーラはモスクワの軍事的な行事に参加しロシアへの支持を明確にした。
- ・ルーラはトランプをナチスの再現だと非難した。
- ・ルーラはベネズエラの独裁者マドゥロを招き、ブラジルとの友好関係を内外に示した。
- ・ブラジルの副大統領がイラン大統領の就任式に参列した。
- ・ルーラはイスラエルを非難しテロ組織ハマスを擁護した。

以上の事柄はいずれもアメリカの外交方針に反するものであり、トランプの神経を逆なでするような言動ばかりである。これらはブラジルの経済に次のような甚大な影響を及ぼす。

50%の関税に関して、ブラジル全国工業連盟は数十万人の失業者が出る  
と試算した。またブラジル全国農業連盟は、国別で見ると2番目に大きい  
アメリカ向け輸出が半減しかねないと警鐘を鳴らしている。そしてアメリ  
カに代わる輸出先を探すのは容易なことではなく、時間の経過と共に大き  
な問題となって表れてくるであろう。

ブラジルの大統領が思慮深く聡明だったならば、国益を考え賢明な判断  
をしたであろうが、労働者上がりの浅はかなルーラはテロリストをかば  
い、凶悪な独裁者を歓迎したりしてブラジルを窮地に陥れている。彼は  
大統領の器ではなく直ちに解任されるべきである。

これまで述べてきたことはブラジルの最悪な外交政策によるものだが、  
ブラジル国内でもアメリカを怒らせる問題が起きている。その一つはブラ  
ジルで営業しているアメリカ企業が不当な扱いを受けた事件で、詳細を次  
に述べたい。

最高裁判事のモラエスはソーシャルメディア X(以降 X とする)上の政治  
家やジャーナリストのアカウントの停止や凍結を命令していた。これを知  
ったイーロン・マスク(Xの所有者)は、2024年4月、「言論の自由に反  
する上に法律違反であり、モラエスによる制限を全て解除する」と宣言し  
た。これに対してモラエスは「最高裁の命令に反するならば、司法への妨  
害と偽情報拡散で X に2万ドルの罰金を科す」と脅した。

モラエスとマスクの争いはエスカレートしていき、ブラジルの X 社の社  
員が「逮捕されるかもしれない」と言い出すに至った。そこでマスクはモ  
ラエスが要求した全ての内容と、それらがブラジルの法律に違反している  
ことを公表した。

この事件を重く見たアメリカの下院司法委員会は詳しく調査し報告書を  
発表した。これによると、2023年以降モラエスが X 上のアカウントの停  
止や凍結を命令したのは150件。これらは政治家やジャーナリストが政府  
を批判したもので、ルーラ政権を批判する者は全て検閲の対象になって  
いた。

そして明らかになったのは、モラエスの検閲による最大の犠牲者はボウソ  
ナーロ派の政治家とジャーナリストであること。彼らはアカウントの停止

や凍結の上に銀行口座の開示、パスポートの没収、資産の凍結などをされている。しかも、モラエスは捜査もせず、検察を通すこともなく、裁判なしの独断で決めている。まさに独裁者のすることである。

トランプ政権が発足した時、マスクはトランプから政府効率化省を任せられ親密な関係にあったことから、ブラジルでのX社に対する不当な扱い、言論弾圧、人権侵害などをトランプに詳しく説明したに違いない。トランプはモラエスに対してマグニツキー法による制裁を決めた。

マグニツキー法とは、アメリカにとって有害な外国人を罰するための法律で、「人権侵害や重大な汚職をした個人や団体を対象として、資産の凍結や入国を禁止する」と定義されている。具体的に言うと、モラエスはアメリカへの入国を禁止され、アメリカにある彼の資産は凍結される。

さらにモラエスと取引した個人や団体も罰せられる。例えば、モラエスにクレジットカードを提供した企業はアメリカでの営業を禁止される。別の例として、ブラジルの民間銀行ブラデスコがモラエスとブラジルで取引した場合でも、ブラデスコのアメリカでの営業は禁止される。これは銀行にとって頭の痛いことで、モラエス一人と取引したためにアメリカでの営業が出来なくなるということである。

50%の関税とマグニツキー法による制裁で、ブラジルの外交に変化が起きるのか、言論弾圧と人権侵害が無くなるのか、時間をかけて見る必要がある。もし目に見える変化がなければトランプにさらなる厳しい制裁を要請しなければならない。ここで、ブラジルの問題なのに何故トランプに頼らねばならないのか説明しておきたい。

ボウソナーロ派の議員達を主体とする野党連合は、ルーラとモラエスに対する弾劾要求を数えきれないほど提出しているが、全て上院議長のところまで止まっている。上院議長はルーラに買収されていて弾劾要求は審議すらされない状態にある。

ブラジルでの活動の限界を見たエドアルド下院議員(ボウソナーロの息子)はアメリカ行きを決める。共和党議員達へのロビー活動を始め、下院の司法委員会や人権委員会に働きかけた。またトランプ政権の高官たちにも接触しトランプを動かすまでに至っている。 ◆

# 《記者コラム》印刷版の発行日数を減らす決断＝読者の皆さまの寛大なご理解を

2025年8月26日 ブラジル日報



ブラジル日報の印刷版紙面

## 経費削減の努力の末の決断

たとえ小さな発行部数しか持たない邦字紙であっても、新聞は時代の証言者であり、社会を映す鏡でもあります。私たちが日々の発行を通じて大切にしてきたのは、単なるニュースの配信ではなく、コミュニティに寄り添い、歴史を記録し、未来へつなぐ営みです。

創刊以来、数え切れないほどの出来事を見つめ、伝え、皆さまと共有してきました。そこには常に、読者の支えがありました。

しかし、新聞を取り巻く環境は年々厳しさを増しています。読者の減少、広告収入の縮小、高インフレによる印刷や流通にかかる経費の高騰。これはブラジルに限らず、世界中の新聞が直面している現実です。

かつては家庭に一紙、あるいは複数紙が届いていた時代もありましたが、今はスマートフォン一つで瞬時に世界中のニュースを知ることができます。便利さの裏側で、紙の新聞を選ぶ人の数は確実に減ってきています。

私たちもできる限りの努力を重ねてきました。編集作業の効率化、印刷コストの削減、デジタル化の推進。無駄を省き、限られた資源をどう活かすか、毎日のように頭をひねってきました。その過程で、時には紙面の構成を見直し、時には人員体制を縮小しながらも、なんとか「週5回刊行」という形を守ってきました。

しかし今、正直に申し上げなければなりません。もはや削れるところは削り尽くしました。経費削減の余地は残されていません。残る選択肢は、発行の頻度そのものを見直すことです。

## 週 5 回 40 頁から週 3 回 32 頁へ

そこで私たちは、現在の購読料のまま、この 9 月 22 日から、週 5 回の印刷版刊行を週 3 回へと減らす決断をしました。ただし、火曜日付は 8 頁のままですが、木曜日付と土曜日付は 12 ページという具合に、できるだけページ数自体は減らさない工夫をします。

具体的には、印刷版のページ数が 8 頁を週 5 回（計 40 頁）から、週 3 回（計 32 頁）に減ることになります。すでに NHK 国際放送をご覧の読者にとっては、中面の記事はすでに知っている内容が多かったでしょうから、その部分が減るイメージです。

1 面のブラジル社会面、2 面の日系社会面、読者の声、俳句・短歌、百年の水流などのオリジナル記事はそのままです。ただし、水、金の配達がなくなる分、1 日遅れで次の日の紙面の中に組み込まれる形になります。

読者の皆さまにとっては大きな変化であり、ご不便をおかけすることになると思います。しかし、これは新聞の存続そのものを守るために必要な一歩です。新聞を毎日手に取る習慣があった方には、きっと物足りなさや寂しさを感じられることでしょう。

「なぜもっと踏ん張れないのか」「なぜ続けられないのか」との声もあるかもしれませんが、そのお気持ちは、私たち自身も痛いほど理解しています。私たちにとっても、日々の発行を減らすことは決して本意ではありません。むしろ、断腸の思いで下した決断なのです。

けれども、ここで現実から目を背けるわけにはいきません。無理をして従来の刊行体制を維持すれば、近い将来、紙そのものを断念せざるを得なくなるでしょう。それは「縮小」ではなく「終止符」になってしまうのです。私たちは今まで、邦字紙が突然廃刊するという悲しい実例を何回も見してきました。私たちが望むのは、あくまで「続けること」。たとえ週 3 回であっても、紙面を通じて読者とつながり続けることに価値があると信じています。

## PDF 版と Web 版は現状でほぼ継続

ですが、印刷代・配達代がかからない PDF 版、サイトからテキスト記事で読める Web 版は毎日配信を維持する意向です。ただし、PDF 版は火曜日 8 頁、水曜日 4 頁、木曜 8 頁、金曜 4 頁、土曜 8 頁という具合に、若干ページ数が減ります。

同時に、1 面のブラジル社会面関係の記事は今まで通り、サイトでは毎日更新されるので、Web 版購読者にとってはほぼ変化がない状態です。

印刷版の読者の皆さんにはこれを機に、セルラーやパソコンを使う方であれば、印刷版のほかに **Web 版**もお申込みいただき、併読していただくことを切にお願いします。

## ポルトガル語記事とバイリンガル SNS 発信

デジタル媒体との連携もさらに強化していきます。紙面を作る作業が減った分の人手を、動画制作などにあてバイリンガルな **SNS** や動画での発信に比重を置きます。

たとえば、15日に本紙インスタグラムに投稿した、日本のアーティスト玉城ちはるの動画 (<https://www.instagram.com/reel/DNZNe3qttJY/>) は25日14時時点で52万回再生を超えました。それだけの人に影響力を持つバイリンガル・メディアが育ちつつあります。

と同時に新サイトでは、日系社会記事のポルトガル語翻訳記事の掲載も始めました。今までは日本語記事だけで届かなかった日系人・ブラジル人に対して、現在では本紙から直接に伝えられるようになっていきます。



最近のインスタグラム投稿の中には52万回再生の動画も

ポルトガル語記事とバイリンガル SNS 発信を駆使することにより、今まで以上に活躍の場が広がってきています。ウェブや SNS を通じた即時

性・臨場感のある発信に加え、紙面ではその流れを整理・分析してお届けするよう役割分担を強めます。そうすることで「日々の即時性」と「紙の持つ重み」を両立させたいと考えています。

現在、PDF版やWeb版の購読者の中で、駐在員や日本在住者の比率が高まってきています。ブラジルや南米の今を伝えることは、日本とブラジルを近づけることであり、たかが邦字紙といえども、デジタル媒体にも片足を突っ込んでいる以上、その役割がますます重要な時代になってきたといえます。

だから、幣紙サイトには【市況・速報】など、Web版読者しか読めないブラジル時間夕方の最新記事もあります。日本のビジネス関係者、金融関係者なども日々チェックしてくれており、その比重が高まっているからです。世界がグローバル化される中で、数少ないブラジル専門紙でもある本紙は、BRICS情報、中国の南米進出状況などを知るには欠くことのできない役割を背負いつつあると自覚しています。

形を変えながら新しい段階へ

新聞は、単なる商品ではありません。読者と記者が共に作り上げる「公共財」だと私たちは信じています。紙面に掲載された記事は、社会の記録であり、未来の世代にとっての歴史の証言です。だからこそ、たとえ印刷版の発行日数が減ろうとも、その意義が失われることはありません。

単なるニュースの羅列ではなく、背景や意味を掘り下げる紙面づくりを心がけます。速報性ではインターネットに及ばないかもしれませんが。しかし、新聞だからこそできる「文脈を示すこと」「事実を積み重ねて歴史を残すこと」があります。私たちはそこに全力を注ぎます。

どうか、この変化をご理解ください。そして、これからも私たちの歩みに力を貸してください。読者の存在なくして新聞は成り立ちません。日々手に取ってくださる方、購読を続けてくださる方、応援の言葉を寄せてくださる方、その一人ひとりが私たちの新聞発行の支えです。

「印刷版が週3回になっても読み続けたい」と思っていただけのような紙面をお届けすること。それが私たちの新しい挑戦です。これまでのご愛読に心から感謝申し上げますとともに、今後も変わらぬご支援をお願い申し上げます。

新聞はまだ終わりません。むしろ、形を変えながら新しい段階へと進んでいきます。私たちはこれからも、読者とともに歩み続けます。（深）



## 85歳の人生。妻の誕生日の写真

サンパウロ 8期 長田譽歳

私は1962年度産業開発青年隊8期生としてブラジル移住しました。産業開発青年隊に入隊したのは其れより3年前でした。長沢師の構想では、青年隊をより良く統率するため幹部隊員を養成して将来は数人単位でブラジル産業開発に貢献出来る要員の育成を考え、静岡県の沼津市の建設研修所に機械班と東京の小平市に測量班を設けましたが、幹部隊員の募集には間に合わず、取りあえず一年目は一般隊員を募集しました。

九州地方と東北地方と中部三県からの17名で発足しました。その中でブラジル移住希望者は私一人でした。相談する友人も無くどうしたものかと考え、少し建設機械の修理経験を積むのが良かろうと考え、長野県の御岳山の麓にある愛知用水公団が造成している、ロックヒルダム現場に働きに行きました。

その現場は24時間の突貫作業現場で、何十台もの重機が働いているので故障も多く、機械修理の仕事は人手不足で残業また残業で相当の貯金も出来たので、その現場から引き上げ実家に帰り長沢師にブラジル渡航の手紙を書くと、4日後には返信の入隊の手紙が届く。

それが何と入隊場所は私の地元の山梨県吉田市でした。富士吉田の上吉田公会堂には5日前に入隊した、隊員が80人程ざわめいていました。

地元山梨県からは私一人でした。あれから数えて63年の歳月が流れ、今は人生の終わりに差し掛かった85歳の老兵に成ってしまいました。残念無念で成りません。

その後の人生は曲がりくねった苦難の連続でしたが、30歳の歳に無事結婚し4人の女の子を設け、上の子は今や53歳に成りました。その長女はUSPの薬学部を出て今は北米の大手製薬会社サンパウロ支社で働いています。次の次女はPUCの経済学部を卒業してPORTO SEGURO社一本で働き、あと7年したら厚生年金を貰えるといっています。三女はUSPの社会科学を卒業してSírío-Libanêsの病院の企画室で働いています。

四女はUSPのTerapia Ocupacionalを卒業して、夫がカナダの大手銀行(カナダ・スコッチア)でのエリート社員として働いているので、カナダに居て、彼女も学校で小学1年生の世話をしています。

4人の子供が其々ブラジル社会で私が考える以上の仕事をしているので、私は移民としてブラジルに来て成功だったと考えています。

次の写真は先日9月30日、妻の80歳の誕生祝いに写したものです。



私と妻と4人の子供たちです。



早川氏もソロカーバから出席してくれました。



家内の誕生祝いに集った全員です。



おさだたかとし      おくさま      さんじゅ  
長田譽歳さんの奥様ルイザさんの傘寿（80歳）に招待されて

ソロカーバ 8期 早川量通

先日、長田さんから電話で、9月28日（日曜日）午後1時半より長田さんの長女のミユキさんのアパートのサロンで長田さんの奥様ルイザさんの満80歳の傘寿の祝いをするので「早ちゃん、家族と親族だけで娘達が家内の80歳の祝いをするから、出来たら来ないか」とお誘いを頂き出席しました。

長田さんと私は1961年の富士吉田市での渡伯準備時からの付き合いで、パラナ州の山の訓練所では4人ずつ一部屋でしたが、彼と同じ寝室で一年間一緒に寝食を共にした間柄です。なお渡伯した8期生は33人で他に10人ほどの先輩が居られました。

お祝いの食事をしながら長田さんはどうやって奥様と知り合ったのかと聞いたら、55年前の思い出話をしてくれ、奥様のルイザさんの上の二人の兄達が二人共ブラジル人を奥さんにしたので、あの当時は今と違い、父親が大変ご立腹でした。

そこへ、新来青年の長田さんがルイザさんと会うためにお宅を訪問していたのですが、3回目の時に父親に「泊っていけ」言われ、寛大な歓待を受けたそうです。見合いは一発で決まったのです。

長田さんの子供は娘ばかりの4人で長女ミユキさん、次女ヒロミさん、三女マユミさん、四女ヒトミさんなので、幼少時と少女時代にはさぞ賑やかだったことでしょう。

奥様ルイザさんの傘寿の祝いは身内だけでのものと言われましたが、大変盛大でした。ヒロミさんがニコンのカメラと思いますが大型のカメラを持っていたので、私が「皆が帰る前に集合写真を撮ったら」と言いまして撮影してもらったのが、長田さんの文の最後にある55人が集まっている写真です。

末っ子のヒトミさんは、カナダのトロントから一人で母親の傘寿に駆け付けられたのです。それは、夫がトロントの銀行に勤務中のためと子供2人が大学と高校に通学中のためです。

長田さんはルイザさんと言う良き伴侶と良き娘さん4人に恵まれたなあと感じた一日でした。

長田家に益々のご繁栄があることを心から祈念致しましてペンをとらせて頂きました。

2025年9月30日



もう一度、古代エジプト特別展を静岡市の県立美術館で  
観ました(2)

富士宮 8期 志方進

展示物はニューヨークのブルックリン博物館所蔵です。6月13日は金曜日だったので入場者数が少なくて撮影出来ました。



## 水鳥を狩る人の レリーフ

### Relief of a Fowler

新王国時代・第18王朝前半、

前1539～前1425年頃

おそらくテーベ

石灰岩

狩りはエジプト人にとって、スポーツであり食料の確保のためだったが、こうして墓の壁に描かれる場合は、死者に魚を提供し、再生を助けるという宗教的な意味合いがあった。



## ナイル河畔の光景 のレリーフ

### Nile Riverside Scene

新王国時代・第18王朝後期、  
アマルナ時代、前1353～前1336年頃  
ヘルモポリス・マグナ（推定）  
石灰岩、顔料

17

上部では、造船技師が木の板をなめらかに仕上げている。下部では、2つの水がめをつるした天秤棒をかつぐ農夫が、急な川岸を登っている。アクエンアテン王が築いた都市、テル・エル＝アマルナを中心に花開いたアマルナ美術は、自然主義的な表現が特徴で、本作のように王宮や都市での日常生活を知ることができる。



2025 06 13

## 穀物を挽く書記 セネヌ

### Senenu Grinding Grain

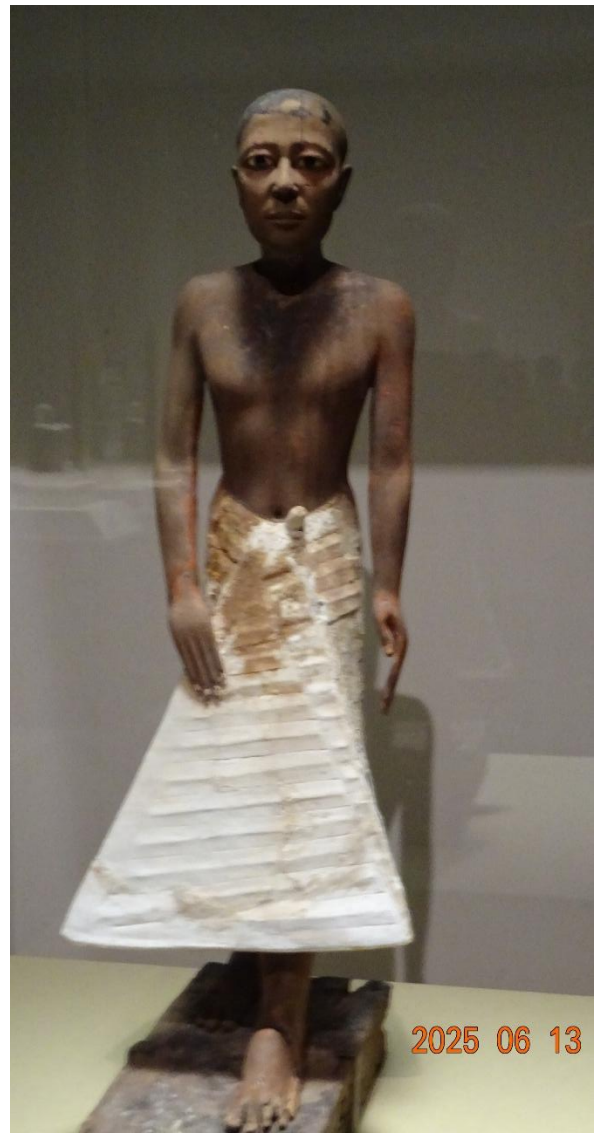
新王国時代・第18王朝後期、  
前1336～前1292年頃

テーベ(伝)  
石灰岩、顔料

18

台座に置かれた砥石といしの上に前かがみになって穀物を挽ひいている人物は王の書記セネヌである。この小像は、来世で死者に代わって働くために副葬されたシャブティだろう。像の全面に彫られたヒエログリフには、生前の行いと王や神々への忠実な奉仕により、恵まれた来世を求める願いが含まれる。

2025 06 13



## 高官メチェチィの像

### Statue of the Senior Official Metjetji

古王国時代・第5王朝後期～第6王朝初期、  
前2371～前2288年頃

サッカラ、ジェセル王墓周壁の南西にあるメチェチィ墓  
木、ジェッソ、顔料、アラバスター、黒曜石、銅合金

52

メチェチィは第6王朝の初代の王  
テティのもとで高官を務めた人物。  
保存状態が良く、木に彩色された  
本作は上層の役人が着る長い腰布  
をまとっている。銅の縁取りに石の  
象眼そうがんという高価な目の装飾が施さ  
れ、大きな頭、長い指はこの時代  
の彫像によく見られる特徴。



## メンチュヘテブ3世 のレリーフ

### Relief of Montuhotep III

中王国時代・第11王朝、  
前1957～前1945年頃  
アルマント、メンチュヘテブ3世の礼拝堂  
石灰岩

77

メンチュヘテブ3世のために建てられた神殿の礼拝堂の壁の一部。左端の赤冠をかぶった人物と、右端の王族の証であるネメス頭巾を着用している人物は、共にメンチュヘテブ3世。神殿の全面に施された装飾は、王の更新祭であるセド祭を表現したとされ、治世が長く続くように願いを込めたのかもしれない。



## シストラム(古代エジプトの楽器)を持ちハトホル女神の前に立つ王

King with Sistra (Rattles)  
before Hathor

プトレマイオス朝時代、前3世紀

出土地不詳  
玄武岩

王が敬虔な息子として、愛と美と音楽の女神である母ハトホル女神の前で、シストラム(ガラガラに似た楽器)を手に立っている。王がシストラムを振っているのは女神を鎮めるため。



## オシリス神像

### The God Osiris

末期王朝時代・第26王朝、  
前664～前525年

出土地不詳  
硬砂岩

冥界<sup>あいかい</sup>を支配するオシリス神は、神話の中で死後に再生したことで、古代エジプト王たちも同様に、来世で再生できると考えられた。そのため、本作のようにオシリス神は生きている王と同じ王冠をつけた姿で描かれることが多い。



## ハヤブサの棺

### Falcon Coffin

プトレマイオス朝時代、前305～前30年

出土地不詳

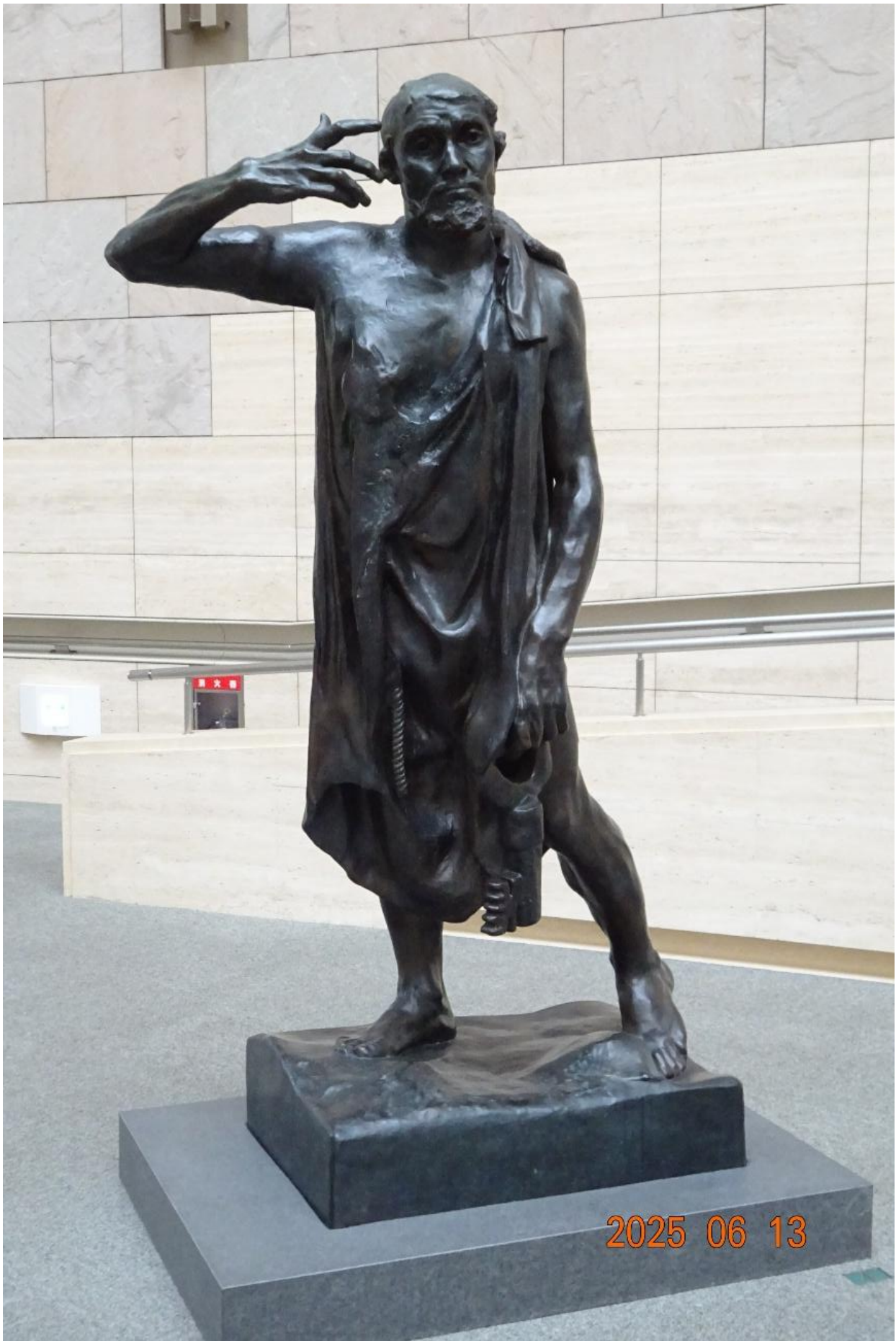
青銅

ハヤブサやハゲワシなどの猛禽類は、王を象徴するホルス神やラー神といった神の化身とされていた。こうした青銅製の棺に鳥のミイラを納め奉納することで、神に自身の祈りや願いを伝えようとした。



静岡県立美術館隣接のロダン館にある彫刻です（2）













## 【編集委員メールアドレス、ご連絡用電話番号】

そ が よし なり

曾我義成 ysoga@rimobloco.com.br

事務所(Escritório) 11-4057-2377

携帯(Tel. Celular) 11-97120-0863

ぼんこはらくにひこ

盆子原国彦 kbonkohara@live.jp

自宅(Residência) 11-3721-1127

携帯(Tel. Celular) 11-97431-9994

おさだたかとし

長田譽歳 takatoshi.osada@gmail.com

自宅(Residência) 11-5563-6929

はやかわかずみち

早川量道 kazumichihayakawa43@hotmail.com

携帯(Celular)15-99778-3107

しかたすすむ

志方進 ssshikata@gmail.com

日本では 070-9087-8862

わたなべすすむ

渡辺進 watanabe@girassolpastas.com.br

事務所(Escritório) 11-3731-6950

皆様ふるってご投稿ください。写真や絵画のご投稿も歓迎いたします。  
ご投稿を受信しましたら、着信通知を発信しておりますが、ご投稿の到着  
を確認してください。

ご意見、ご提案、お叱りなどもお寄せください。

## 【次号予定、お願い】

次号は12月上旬に発行予定です。

ご投稿は11月22日(月)までにお問い合わせ致します。

## 【編集後記】

今号もご投稿をありがとうございました。

皆様どうぞお元気でお過ごしください。